

多湿黒ボク土



十勝管内の多湿黒ボク土に分類される畑の土壌断面です。

黒々として一見肥沃そうに見えるこのような黒ボク土は、十勝の農地の約半分を占めておりますが、非常にやせた火山性土の一種で、明治の開墾当初、作物は全く育たず、また水の便も非常に悪い、「高台」と称して入植者が敬遠していた土地に広く分布しています。

このような農地で農業生産が可能となったのは、明治期後半に化学肥料(過燐酸石灰: 獣骨を硫酸で処理)が登場してからでしたが、肥料を施してある程度収穫を得られるようになってからも、湿性土壌が多いことから、度々、冷湿害で壊滅的な打撃を受けました。

黒ボク土が分布する広大な台地が優良農地へと生まれ変わったのは、土地改良事業による本格的な排水改良の開始と相まって、化学工業の隆盛とともに十分な土壌改良資材の投入が可能となった昭和40年代以降のことです。